
BURNING RANGERS (バーニングレンジャー)

宇宙の彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BURNING
RANGERS
バーニングレンジャー

【ZPDF】

Z0895F

【作者名】

宇宙の彼方

【あらすじ】

～来るべき未来世界。科学の発展により人類の生活環境は急激な変化を遂げ、そこで起こる災害もまた、かつてのそれとは比べものにならないほど危険なものになっていた。このような危険災害に対処すべく、消防レスキュー隊から編成、グレードアップされた救助活動のエキスパートチームが、特殊消防レスキュー隊「バーニングレンジャー」である。新しくバーニングレンジャーに採用された「ショウ」と「ティリス」にさっそく出動命令が下される。彼らの先に待ち構えているモノとは…

第1話「炎のHンジェル」その1（前書き）

「2次創作」ってヤツです。実際のオリジナルとは、内容が異なっています。と言つたか、結構前なんで、記憶があやふやになつてゐるんで笑

最後にプレイしてから10年経つてます！自分でもビックリ！あとは、自分で想像を膨らませて書いていきます

第1話「炎のハンジェル」その1

「助けて 重いよ 」

大人の力でも動かすことの出来ないコンクリートの隙間で、10歳の少年は動けないでいた。崩れ落ちたコンクリートの壁の下敷きになつていて、なんとか小さな隙間で押し潰されずに済んでいるが、時間と共に少年の体に掛かる重さは増してゆく。

「あ～いつ！今出してやるからなつ」

厚いコンクリート壁に光を遮られた暗闇の中、微かに見える小さな光の向こう側で、数人の大人達が少年を助け出そうと、必死に重い塊を持ち上げようと奮闘している。

その時、強烈な爆発音と共に灼熱の炎が辺りを包んだ。悲鳴を上げる大人達。少年の体に掛かるプレッシャーが更に増していく。

「もう駄目だ 蹄めよう、俺達まで死んでしまうぞ！」

その言葉は10歳の少年に、これまでに無い程の絶望感を与えた。

「助けてえ～！」と泣きながら叫けんだが、声を頑張つて振り絞るほど大人達の足音は遠くに、小さく聞こえてゆく。

時間と共に、辺りの温度は急上昇し、コンクリートの重みで呼吸が困難になつていいく少年。聞こえるのは、炎が空気を焦がす「ゴオゴオ」とした音と崩れ落ちる建物の内装。

「熱いよあ、苦しいよ 誰か」

少年は薄れていく意識の中、必死に神に祈った。

しばらくすると、爆発音が以前に増して激しくなる一方、それに反して、体にジリジリと感じていた熱さが収まっていく。そして、少年の上に容赦なく压し掛かっていた重いコンクリート壁が、少年

の体から浮いてゆく。薄暗い闇の中見えていた小さな光は次第に大きくなり、サイバースーツに重々しい翼の様な機材を装着した男が現れた。

「助けに来たぞ、少年。バーニングレンジャーだ」

その男の姿は少年の目には天使の様に映つた。

「てんし…」

「来るべき未来世界。科学の発展により人類の生活環境は急激な変化を遂げ、そこで起る災害もまた、かつてのそれとは比べものにならないほど危険なものになっていた。このような危険災害に対処すべく、消防レスキュー隊から編成、グレードアップされた救助活動のエキスパートチームが、特殊消防レスキュー隊「バーニングレンジャー」である。

彼らは、火災現場である建物の中へ突入し、爆発、炎上など、時を追うごとに変化していく状況下で炎を鎮火し、逃げ遅れた要救助者を助け出し、最終的に災害の原因を排除することが目的である。」

「1秒を感じ取れる事

命を大切にする事

女神を見方に付ける事

BURNING RANGERS

バーニングレンジャー

うるべ

第1話「炎のエンジェル」その1（後書き）

小説を書き始めてまだ3～4ヶ月の素人です。ですので文の作りや構想のまとめ方など、雑で荒かつたりしますが、情熱だけは自信がありますので良かったら見てやって下さい。

第1話「炎のHンジェル」その2

クリス（クリス・パートン）は2枚の資料を眺めていた。今日は、バーニングレンジャー採用試験日であった。

全国で活動している消防隊の中で、各国1名の超エリートが採用試験を受ける事ができる。

試験項目は主に「身体能力試験」・「火災知識試験」・「救護試験」や「状況判断テスト」・「適応能力試験」と、5つの全国トップクラスの試験が用意されている。

常に現場の状況が変化していく近年の災害現場では、特殊消防レスキュー隊「バーニングレンジャー」であっても、命を落とす危険性は免れない。それでも、「バーニングレンジャー」と言う頂点を目指す者達の目には、「肩書き」などと言う欲望は微塵も見えず、ただ、純粹に救助を待っている救助者を助け出し、街を災害から守りたいと言う「信念」が見える。

そんな信念を持ったエキスパートチームだからこそ、「バーニングレンジャー」は人々の希望であり、憧れなのである。

「どうだクリス、いい奴が見つかったか？」

シルバーの髪を後ろで括っているリード（リード・フェニックス）は、いつもと変わらないクールな面持ちでクリスに問いかけた。

「そうね、2人共、個性が強そうだけど試験の総合評価では、貴方と互角よ」
クリスはブロンドの髪を搔き上げながら、2枚の資料をリードに手渡す。

バーニングレンジャー採用試験で歴代トップの総合評価を叩き出した事を、自分で誇りに思つていただけに、心なしか不機嫌そうにリードは資料を受け取つた。

「ショウ・アマバネに、ティリスか、よくレディが採用されたもんだな」

「安心して、ティリスは受験生の中でも、バランスの取れた人材よ。ただ…」

クリスはショウに關しては、少し言葉に詰つた。

「どうしたんだ？」

「ショウ・アマバネはすべてに置いてトップレベルの成績なんだけど、適応能力試験で少し感情に流されてしまう傾向が見られたの」

リードは両腕を胸の前で組んだ。

「そう言う奴は、いつか暴走して身を滅ぼす。災害現場で大切なのは、常に冷静でいる事だ」

「そうね、じゃあ後は任せたわ、リード」

クリスは軽く手を振つて、スチール製の大きな自動扉を出て行つた。

「よし、じゃあ始めるか」

それ程広くもない長い廊下の中央でベンチに座るショウとティリ

ス。ひんやりと、どこか冷たそうなグレーの鉄製の壁から見える外の景色は、光り輝く宝石箱の様に煌びやかで、漆黒の夜空がより雰囲気を増長させている様に見える。

「やつほお、私はティリス。これからも私達はチームだね、一緒に頑張ろう」

しばしの沈黙を破ったのは、ティリスであった。笑顔が似合つまだ幼げな表情は、いつも周囲の人々に安らぎと笑顔を与える。

「ああ、俺はショウだ、ショウ・アマバネ。ヨロシクな」

ショウも笑顔を返した。

「ショウは、どこの国出身なの？」

「俺は日本だ。ティリスは？」

「私は、解らないの」

「解らないつ？」

ティリスの謎めいた返答にショウは問い返した。

「私、子供の頃、災害で両親を無くして、政府の運営する養護施設で育てられたの。だから養護施設以前の記憶があんまり無くて、どこの国で生まれたかは解らないの」

「ああ、ゴメン、嫌な事思い出させちまつて」

「ううん、別に良いの。一応、養護施設はイギリスだつたから。それだし私の顔つてヨーロッパっぽくない？」

ティリスはそう言いながら手をパチパチとさせた。

「そうかあ」

ティリスの明るい性格は、さつきまでの緊張していたショウに笑顔を取り戻させていた。

その時、2人の背後の自動ドアが開き、シルバーの髪を後ろで束ねている男が出てきた。

「俺はバーニングレンジャーのリードだ。今から君達には、バーニングレンジャーとしての基礎をレクチャーさせて貰う。では付い

て来い」

ショウとティリスは言われるがままにリードの後に付いて行った。

つづく

第1話「炎のハンジェル」その3

2人が案内されたのは、『ファイットティングルーム』と書かれた半円状のホールだった。円形の天井に設置されているスポットライトが、ダークブルーに染まる床をオシャレに照らし出す。入口から視界に広がる壁には、1～10と数字の書かれた四角いスチール製の扉が見える。

「ではティリスは『6』と書かれている部屋、ショウは『7』と書かれている部屋をこれから使ってくれ」

淡々と説明するリード。

「了解」

ショウとティリスは消防レスキュー隊で培つたキレのある返事をした。

「部屋の中には、君達の体に合わせて作られた『レスキュースーツ』が入っているから着てくれ。着替えが済んだら個室内の反対側の壁にも扉がある、その扉から出てきてくれ」

「今日、採用試験に合格したバッカなのに、もうレスキュースーツが用意されているなんて、さすがバーニングレンジャーだな」期待に胸を膨らませ、喜びを隠せないショウ。バーニングレンジャーのレスキュースーツは、バーニングレンジャーにしか着る事が許されないのだ。つまり、全国の消防レスキュー隊の中でも選りすぐりの人間だけが、そのスーツに腕を通す事ができる。

「君達には、今日中に出動できるレベルに達して貰う」

「つて事は明日から、災害があれば早速仕事が出来るつて事なんですね」

目を輝かせるティリス。

「そうなつて貰わなければ困る。では俺は向こう側の部屋で待つている」と言い、『5』と数字が書かれた部屋に入つて行つたリード。

ト。

「じゃあ、俺達も着替えるか」

「イエーイ」

扉の前に立つたショウ。扉の横には手の静脈紋が設置されている。手を翳すと扉の中央に横一直線の隙間ができる、上下に扉が開く。

リードが隣の部屋でスタンバイしていると、フィットティングルームの扉が開き、着替えを済ませたショウとティリスが現れた。特殊なラバー製のスーツに、両足には、空中浮遊力を高める『ホバリングシユーズ』、背中には『バーニアユニット』と呼ばれる、翼の形をした超小型飛行ジェットエンジンが装着されている。

「ホバリングシユーズとバーニアユニットの使い方は、採用試験で説明して実際に使つてもらつたな。初めの内は、ホバリングの感覚を取るのが難しいが直ぐに慣れるだろ?」

「了解」と返事をする2人。

「では、これから最低限覚えて欲しい『緊急回避』についてレクチャーをさせて貰う」

天井の高い通路を歩いて行くリード。壁も床も不思議な黒いタイルで覆われており、タイルの隙間から見える赤と青の光が、煌めく宇宙の様にも見える。

20メートルはある通路の中央で歩みを止めたリード。

「では2人共、初めはそこで見ていろ」と言い、レスキュースーツのどこかに内蔵されている無線機に向かって「ではクリス、頼む」と喋るリード。

次の瞬間、リードの立つていた通路の真横の壁から爆発と共に炎が吹き出した。バニアコニットの翼が開きホバリングシユーズが地面を蹴り上げる。リードは後方宙返りの様な軌道を描きながら、宙高くを舞い炎上する炎を回避した。そして、綺麗な放物線を描きながら地面に着地するリード。地面に足が着いた途端にホバリングシユーズから強力なエアーが噴射され、着地時に足に掛かる負担を大幅に減少させる。

ショウとティリストの耳には、爆発とリードが飛び立つた光景が同時に見えた。と同時にリードの動きの方が早く感じた。

「では、ショウ。やつてみる」

細かい説明も無く、いきなりショウを指名したリード。

「やつてやるぜ」と自信たっぷりと言つた感じで通路の中央へ向かうつショウ。

「いつでも良いぜ」

通路の壁に意識を集中し、ショウが言つた瞬間、先ほどとは違い、ショウの足下から爆発と共に炎が吹き出し、ショウを飲み込んだ。

「うわあああつ」

「ストップ」

感情を感じられない様な抑揚のないリードの掛け声と共に炎が収まつた。床でうずくまるショウ、無傷で有る事に気付き、訳の解らないまま立ち上がつた。

「今のは、熱風に炎のホログラフを組み合わせたモノだ」

「そつか、助かった」

と、やつと状況を理解し胸をなで下ろすショウ。

「ショウ・アマバネ死亡」と冷たく言い放つリード。

「おいおい、今のはアンタと同じ横の壁から炎が吹くと思つてたからで、足元からと解つていれば避けれたさ

「その言葉、災害現場で同じ事が言えるか?...」

「つ.....」

ショウは何も言い返す事が出来なかつた。

「災害現場では常に状況が変化していき何が起るかは、ベテランのバーニングレンジャーでも完璧に読む事は不可能だ。だが、一瞬一瞬の変化に瞬時に気付き、対処する事は可能だ」

真剣にリードの話を聞くショウとティリス。だが、少しだけ不機嫌なショウ。いくら上司だとは言え、馬鹿にされたのに腹が立つた。

リードが続けて話す。

「一瞬を感じろ、一秒を読み取れ。常に意識を集中し、些細な変化も見逃すな」

「一瞬を感じる...」

ショウは、俯きながら今の言葉を胸に刻み込んだ。

「一秒を読み取る...」

同じくティリスも、リードの言葉を胸に刻み込む。

「じゃあ、もう一度やつてみろショウ」

リードの前に、顎を通路を進むショウ。さつき失敗した時の顔とは違い、鋭い目をし、意識を集中している。

そして、通路の真ん中に立つた。

「一瞬を感じ取れ...」

もう一度、自分に言い聞かすショウ。

『田で見るんじゃない、体で感じるんだ...全ての意識を集中しろ

その時、ショウの耳に小さな音が聞こえてきた。

キュュコン…とエネルギーが一点に集中する様な、空気が吸い込まれている様な音が先程とは反対の壁から、小さく聞こえた。

バニアユニットの翼を広げ、ホバリングシユーズで地面を蹴り上げた瞬間、異変を感じた壁から爆発と共に炎が噴出した。

綺麗な放物線を描き、地面に着地するショウ。

「よしつ、解つたぞ」

喜び飛び跳ねるショウに対し「では、次はティリス」と、ショウに講評を言う事も無く先に進めるリード。

その様子に、またイラツと感じるショウ。

ティリスも一度目は失敗したが、2度目で緊急回避を体得した。

「よし、腰に付いている『消火銃』だが、これも使い方は採用試験で実際に使つてもらつたな。では次のレクチャーだが…」
リードが次のレクチャーに移ろうとした時、通路内に警報音が鳴り響いた。

スピーカーからクリスの声が聞こえる。

「クリスより各員へ、日本の東京にある研究施設にて大規模な火災が発生！速やかに出動準備を開始し、所定の位置に着け」
クリスの緊迫した声が館内に響き渡った。

「マジかよつ！？」

間が悪そうに顔を顰めるリード。

「俺達は？」と聞くショウ。

「お前達は、残つていろ。まだ出動レベルに達していない」

「でも、俺達にだつて何か出来るかも知れない！じつとしているのは嫌だ。俺達も連れて行つてくれ！」

横で頷くティリスもショウと同じ気持ちなのである。

少し考える仕草を見せたリードだが「いや、やっぱり駄目だ。お前達をみすみす殺すような事は出来ない」

そう言つた時、スピーカーからクリスの声が聞こえた。

「リード、ライクとレッツが死んでメンバーも足りない。まだ頼り無いけど、彼らを連れて行くしか無いわ。私がしつかりと彼らを無線で誘導するから。アナタとビックの2人では不可能よ」

「わかつた…行くぞ、ショウ、ティリス」

3人は急いで所定の位置へと走つていった。

次回「第2話「新生エンジェル」」

初任務を迎えるショウとティリスを待ち受けた災害とは…

第2話「新生エンジエル」その1（前書き）

かなり短い文になりましたが、ココで切りたかったので…

第2話「新生エンジェル」その1

昼間とは違う、静まりかえった深夜の東京の街に、一際赤く光る建物を目指すバーニングシップが空を飛ぶ。

赤いバーニングシップは、消火機能・消防機能を携えた大型の飛空挺である。左右の羽には、消火剤を詰め込んだミサイルが装備されており

、大規模な火災現場などに使用される。消火ミサイルで大部分の炎を鎮火させ、バーニングレンジャーが建物に侵入する為の突入口（ちんか）（非常用ポート）を確保するのだ。

バーニングシップの先頭から照射される2本のハイビームが、燃えさかる炎に包まれた巨大ビルを捕らえたと同時に、2発の消火ミサイルが空を斬る。

白い噴煙の尾を引きながら燃えさかる巨大ビルに衝突するミサイル。一気に爆発し、白い消火剤がビルを包み込んだと所に、バーニングシップから、ショウ・ティリス・リード・ビックの4人のバーニングレンジャーが翼を広げ、それぞれの非常用ポートを目指し舞い降りた。

非常用ポートに向かうバーニングレンジャーの耳に付けられている無線ホン。そこにバーニングシップのメインコアで、これから彼らのナビゲーターを担当するクリスからの、さつそくの情報・伝達事項が告げられる。

「クリスより各員へ、エネルギー路が非常に危険な状態に突入。なお、避難が確認されていない研究所員が若干名いる模様。各自、

非常用ポートから進入、速やかに行動を開始してクリスの簡略かつ的確な情報・指示が伝えられる。

ビルの屋上にあるガラスで出来ている非常用ポートを突き破り、下を目指すショウ。巨大な煙突のような通路を真っ直ぐ降下していく。

その時、降下してゆくショウの頭上で爆発が起き、炎がショウを追いかける。

「ちくしょう、現場の状況は変わるってか」

地面が見え、その先で防火用のシャッターが閉まりかけている。バーニアユニットの出力を上げ、迫り来る炎を振り切り一気に通路を突っ切る。

間一髪防火シャッターを通り抜けるショウ。シャッターが閉まる同時に、先程まで迫ってきた炎が防火シャッターに激突し、爆音と共に変形した。

続いてクリスからの無線が入る。

「ティリスとビックは、施設の延焼を食い止めつつ要救助者の救助を！」

「了解！」と、ティリスとビックの声がスピーカーから聞こえる。

「ショウとリードは、地下最下降の制御ルームへ直行して！」

「了解！」

気合の籠ったショウとリードの返事が各員のスピーカーに流れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0895f/>

BURNING RANGERS（バーニングレンジャー）

2010年10月11日00時57分発行